

反キリストが艱難時代にやることを、すでに歴史において大抵やってのけた人物。アンティオコス・エピファネスよりも、何十倍何百倍も強力なのが反キリストです。アンティオコス・エピファネスの恐ろしさが分かると、その恐ろしさの何十倍何百倍って、どのくらい恐ろしいかが分かるんですよ。だから、過去に起こった預言の確証であると同時に、未来を考える上でも重要な材料を提供しているということで、非常に今日的だと思うんですね。

BC536年にダニエル書 10章 11章 12章が書かれました。今から 2560 年前です。これが書かれた 2560 年前から 350 年後に起こることを、ダニエルは非常に精密に、詳しく詳しく書いたんですね。それをひと言で言うと、この人物の登場で、ユダヤ人がむちゃくちゃ苦しむという内容です。それをなぜ前もって語っているのか。その時代に生きている人たちに、希望を与えるためです。こんなにえげつない奴が出てくるが、いつまでも続かない。こんなに恐ろしいことが起こるが、脱出の道がある。約束がある。

私たちは根拠もないのに希望を持てません。希望というのは、何々これこれという約束に基づいて、初めて持つことができる。聖書預言は、興味本位に「あ、当たってる」という次元の話じゃない。この終末時代、歪んだことが横行する時代の中で、ぶれずに神を畏れて真っすぐに生きていくための動機づけと希望を、読み手に与えるためなんです。

初めて来られた方のために、11章のあらすじをざっと申し上げます。今から 2300 年くらい前、ヨーロッパからインドまで統一した、天才的な軍事戦略家がありました。アレクサンドロス大王です。彼は後継者を指名する前に、熱病に罹って 33 歳であっけなく死んでしまいました。この広大な帝国の後継者はいったい誰なのか。彼には息子がいましたが、まだ 1 歳。それで、有力な部下たちの間に権力闘争が起こり、アレクサンドロス帝国は 4 つに分かれます。なんと、このダニエル書の中に、アレクサンドロスのことも、彼の死後に 4 つに分かれることも預言されてるんです。それはすでに、このシリーズで解説しています。

この 4 つが、半世紀にわたっていざこざやるんですが、最終的に 3 つになります。①アレクサンドロスが生まれた国マケドニア。②セレウコス朝シリア。③プトレマイオス朝エジプト。その最後の王は女性でした。シーザーと恋仲になったクレオパトラです。セレウコス朝シリアとプトレマイオス朝エジプトは覚えてください。

マケドニアはヨーロッパ。セレウコス朝シリアはアジア。プトレマイオス朝エジプトはアフリカ。つまり、ヨーロッパ・アジア・アフリカの 3 つをまたいでいるのが、アレクサンドロス大王が造った大きな帝国。この中で、特にイスラエルに関係するのはシリアとエジプトです。イスラエル／ユダヤの国が、シリアとエジプトの間にあったからなんですね。

アフリカの諺に「2頭のサイが喧嘩したら、地面の草は枯れる」というのがあるそうです。サイとサイがガチコンとマジで戦ったら、地面の草も踏みにじられて、ぺっちゃんこになって枯れてしまう。

シリアはサイですよ。エジプトもサイですよ。シリアがエジプトに攻撃する時、イスラエルはガガガと踏みにじられ、エジプトがシリアを攻撃する時もバババと踏みにじられる。仲の悪い強国に挟まれている小さな国・小さな場所は、ええ迷惑です。だけど、そういう場所にユダヤの国がある。そこが、神がアブラハムに約束した約束の地なんですよ。

さて、シリアには26人の王が出てきて、そのうちの半分の13人はアンティオコスを名乗ります。すなわち、セレウコス朝シリアには、アンティオコスが1世から13世までいるんですよ。

その中で、特に重要で特にエグイのが、今日読むアンティオコス4世エピファネス。エピファネスは現神王／現人神。この王は神が現れたお姿なのだと、人間のくせに自分は神だと言う非常に傲慢な名前。

しかしユダヤ人は、彼をエピマネス／狂人王と呼びます。狂ってると。エピファネスとエピマネス。“ちょうふししぎかい”（調布市議会）と“ちょうふしぎかい”（超不思議会）。これは関係ないですが。要するに、暴君なんです。今日は、この人物についての預言を見ます。

ダニエル書 11章

21 彼に代わって、一人の卑劣な者（アンティオコス4世エピファネス）が起こる。彼には国の権威は与えられないが、不意にやってきて、巧みなことばを使って国を奪い取る。

なぜ卑劣なのか。不意にやってきて、巧みなことばを使って国を奪い取るからだ。不意はヘブライ語でシェルバー。これは語根がシャロームと似てるんですよ。新共同訳聖書には、平穏のうちにやってくると書いてあるんですね。つまり、この人物が権力を握る時、戦争やりまくって暴力使いまくって、ド派手に登場するんじゃない。平和の使者のようにして、スッとやってくる。ハッと気づいたら、トップに昇ってるみたいなの。「あんた、どっから来たん?」「あなたのルーツ、いったい何?」

ハッと気づいた時には世界中が「すごい!」と見上げる人物が、艱難時代に登場する反キリストですが、その登場の仕方とよく似ている。不意にやってきてというのは、不意にやって来たように感じる。ド派手なこととしてない。平和のうちに、ハッと気づいたら、いつの間にかトップに昇っている。巧みなことばを使って、外交力を使って、国を奪い取る。非常に平穏なデビューですが、やることはものすごくえげつない。国の略奪、国家乗っ取りです。

アンティオコス4世エピファネス（在位 BC175-BC163）の背景を見ましょう。アンティオコス4世のお父さんはアンティオコス3世です。

アンティオコス3世は、シリアの中で名君として知られています。何人か良いというか政治力のある王が出て、そのうちの一人なんです、1つだけ大失敗やってるんです。

アンティオコス3世は新興勢力のローマを侮って戦争しました。それがBC190年。ローマはまだ帝国ではなく、元老院がコントロールしている共和制ローマですよ。まだまだ新興勢力で、セレウコス朝シリアの方が強いと思ってたんですが、ローマの教育は戦闘国家ですよ。シリアはこの戦争で大惨敗した結果、アパメイアの和平条約を結ぶんです。世界史やった人は覚えてると思いますが、アパメイアの和約というのがあるんです。

セレウコス朝シリアが負けた結果、ヨーロッパに持っていた占領地と、今のトルコ・小アジアの占領地を、全てローマに譲りました。同時に、12年間で1万2000タラントという天文学的な賠償金を払うこと。毎年1200タラントの莫大な賠償金をローマに払う。これは払えない金額なんです。なので、払えなくて居直られたらダメなので、アンティオコス3世の息子を人質に取って、ローマに連れて行くんです。この人質になったのがミトラダテス。後のアンティオコス4世エピファネスです。

生まれ故郷のシリアを離れ、ローマに連れて行かれたミトラダテスは、さぞ寂しかった？いや。そうじゃなかった。ローマに来て、「これが先進国なんだ。シリアにいた時はシリアが一番いいと思ってたけど、遅れてたんや」ローマの建築物、軍隊システム、政治のやり方、どれ一つ見ても非常に進んでいる。その根底にあるのは、ローマのオリジナルではなくてギリシア文明／ヘレニズムなんです。彼は人質となってローマにいた間に、グレコローマン／ギリシア・ローマのシステムに心酔して、「もし私が国に帰って王になる日が来るなら、私の支配地域はギリシア式・ローマ式の文明で塗り潰す。全住民をギリシア式文明で開化させる」と決心するんです。

だけど、帰る目途は立たない。だって、12年間で1万2000タラントですから。返し終わるまでは帰れないと思ってたら、チャンスが来たんです。お父さんのアンティオコス3世にはもう一人の息子、ミトラダテスの兄がいて、次の王に任命します。それがセレウコス4世。ということは、弟のミトラダテスを人質に取っているよりも、王の跡継ぎを人質にする方がいいですよ。人質の価値がちょっと下がった。そこでローマは、「おまえはもう帰っていいから。その代わり、今の王のセレウコス4世の息子を人質に取る」人質交換。不思議な運命の巡り合わせで、ほんまやったら12年間留め置かれるところを、彼は故郷に帰ることができたんです。

セレウコス4世が死にました。その息子は人質なので王になれない。セレウコス4世のもう一人の息子はまだ赤ちゃん。そこで、「血筋からいうと彼が王になるべきだけど、まだ赤ちゃんだから、私が後見人になります。摂政政治というか、彼が独り立ちするまで私が代理人として側にいて、代わりに政治をやります」

うまく入っていくんです。

しかし、この赤ちゃんはアンドロニコスという人に殺されました。その時、ミトラダテスは「王の息子を殺すとは何事か！」とアンドロニコスを処刑します。実はこの赤ちゃんを殺したのはミトラダテスなんです。自分が殺しといて死刑にして、死人に口なし。そんな方法で王になったのがミトラダテス。ミトラダテスは王になってアンティオコス 4 世と名乗りました。非常に卑劣な、権力の地位に就くためには手段を選ばない。なんだってやるような。

一人の卑劣な者（ミトラダテス）が起こる。彼には国の権威は与えられない（人質だったから）が、不意に（平穩に）やってきて、巧みなことば（外交力）を使って国を奪い取る。奪い取った。そして、まんまとアンティオコス 4 世を名乗った。このことが起こる 350 年以上前のことばが 21 節なんです。

22 彼の前では洪水のような軍勢（エジプト）も、契約の君主（大祭司）さえも一掃されて打ち碎かれる。

これはミトラダテスの一生について、ダイジェストで語っています。シリアの永遠のライバルはプトレマイオス朝エジプトですが、エジプトは人口が多い。軍勢が多いんですよ。ところが、いろんな方法を使って、今までの歴史では、シリアはエジプトに負ける方が多かったのに、彼になってから破竹の勢いになるんです。

契約の君主はメシアのことではありません。君主と訳されている言葉はいろんな意味に使われますが、契約によって権威ある者として認められたということで、ここでは大祭司のことです。エルサレム神殿の最高責任者である大祭司。大祭司さえも一掃されて打ち碎かれる。アンティオコス 4 世の時代にいた大祭司はオニアスです。オニアスは敬虔な神を畏れる人で、悪を憎んで善政を敷くというか、非常に人格的な感化力で、指導者としてユダヤ人に大きな影響力があったと言われています。

オニアスには弟のヤソンがいました。ヤソンの元々の名前はイエス・キリストのイエスです。当時、イエスという名前がいかにか一般的な名前が分かるんですね。イエスはヘブライ語でイエシュア。ギリシア語でイエスース。“主は救い” という意味です。

ヤソンはイエス。名前はいいのに、まあ酷い男。むちゃくちゃ悪いイエスですよ。基本的に兄を煙たがっている弟です。神を全く畏れていない。オニアスは「ギリシアの文明をエルサレムに持ち込むことはまかりならん。これは世俗のもので汚れている！」ですが、弟のヤソンは「律法とか祈り・断食・宗教はもういい。世界は動いている。今世界の潮流は、ローマとギリシアの文明じゃないか！兄貴はあかん」なんと、アンティオコス 4 世のところに行って、「王よ、あなたの志は、ご自分の

支配地域を全部ギリシア文明で塗り潰すことですね。その最大の障害は兄貴です。この大祭司が律法ばかり言って、ギリシア的なことを入れようとしません。もし私を大祭司にしてくれたら、莫大な賄賂をお渡しします」
それで、アンティオコス4世は「ヤソン、おまえが今日から大祭司だ！」
ヤソンは大祭司になると、神殿の中にギリシア的なものをいっぱい入れていきます。

ギリシアの彫刻って、やたらと裸が多いじゃないですか。オリンピックの発祥もギリシアでしょ。だから、毎回オリンピックの先頭はギリシアですね。彼らは真っ裸で競技したんです。ギリシア人は見せられるような体形なのかもしれませんが、裸なんですよ。

ユダヤ人にとって裸は恥なんです。だから、裸の恥を覆うための衣を着なさいと。衣を着るのはエチケツでもあるし、裸は恥。しかし、ユダヤ人の若者たちが、裸でスポーツするってカッコイイと。その流行を生んだ立役者がヤソンです。また、エルサレム神殿の向かいに大劇場を造って、エンタメで偶像をほめたたえるような踊りや演劇をたくさんやって。そして、ギリシア式のつばの長い帽子がありますが、当時のユダヤの若者たちはギリシアファッションが世界最高というので、ユダヤ人なのに外国人みたいなユダヤ人、ギリシア人みたいなユダヤ人。それを先導したのがヤソンなんです。

ヤソンには部下がいました。ベニヤミン人のメネラオス。彼はアンティオコス4世のところに行って、「私を大祭司にしてくれたら、ヤソンよりもっとたくさん賄賂出しまっせ」「おまえ、やれ」
もう大祭司職がガタガタになっていくんです。そもそも、ベニヤミン族はレビ族じゃないんですよ。では、レビ族ならだれでも大祭司になれるか？なれません。なれるのは、アロンの直系ツアドクの部族・氏族だけです。

アンティオコス4世は12年間で1万2000タラントの借金を返済しないと駄目なので、高額な賄賂を贈る人がいたら、なんぼでも言うこと聞くんですよ。というか、もっと持ってこいと。それで、契約の君主（大祭司）さえも一掃されて打ち砕かれた。それをやったのがアンティオコス4世なんです。

23 彼は同盟を組んだ後で欺き、少ない人数で勢力を増していく。

24 彼は不意にその州の肥沃な地域に侵入し、彼の父たちも、父の父たちもしなかったことを行う。彼は、そのかすめ奪った物、分捕り物、財宝を、自分たちの間で分け合う。彼は計略をめぐらして要塞を攻めるが、それは、時が来るまでのことである。

ここに、彼が短期間のうちにグッと勢力を伸ばした2つの方法が書いてあります。
①敵に対しては策略。同盟を組んだ後で欺く。同盟を結んでは欺くことの繰り返し。特にエジプトに対してそうなんです。これは後で言います。
②味方に対しては大きな報酬を与える。
これは、アレクサンドロスを見倣ったんじゃないかなと思います。

彼の父たちも、父の父たちもしなかったことを行う。

普通は、戦争で分捕り物・財宝を取ったら、全部王の私財になりますが、彼は、そのかすめ奪った物、分捕り物、財宝を、自分たちの間で分け合う。

自分に付いてきた人たちに、片っ端からプレゼントしたんですよ。

むちゃくちゃ気前良い。こんなことは、彼の父たちも、父の父たちもしなかった。

歴代のシリア王朝で、こんなに分け前をふんだんにくれる奴はおらんかった。

この人について行こう。それで、勢力を増していったんです。

彼は同盟を組んだ後で欺く。エジプトとの1回目の戦争の時、エジプトの王ファラオはプトレマイオス6世フィロメトルです。

プトレマイオス6世の時に同盟を結ぶのはアンティオコス4世エピファネス。

実はプトレマイオス6世はまだ子供で、お母さんはクレオパトラ。

クレオパトラはたくさんいるんです。アンティオコスがたくさんいるようにね。

このクレオパトラはアンティオコス4世の妹。

つまり、プトレマイオス6世はエジプトの王ですが、アンティオコス4世の甥っ子。

「我々は血縁関係があるから兄弟みたいなものだ。我々の先祖はいつも競い合っていたが、この代は仲良くやっていったらいいじゃないか」と非常に巧言を使って、プトレマイオス6世を操り人形のようにコントロールするんです。

その結果、エジプトのアレクサンドリア以外の全地域が、アンティオコス4世のものになります。外交力で。アレクサンドリアは非常に重要な文明の町ですよ。

でも、そこだけ。その周囲だけ。ほかの広大なエジプトは、ハッと気づいたら、シリアの軍門に降ってる。同盟を組んだ後で欺きを繰り返したんです。

なので、エジプト人は非常に怒って、プトレマイオス8世を立てます。

プトレマイオス8世の時に戦争するんですが、それが25節です。

25 彼は勢力と勇気を駆り立て、大軍勢を率いて南の王（プトレマイオス8世）に立ち向かう。南の王も非常に強い大軍勢を率い、奮い立ってこれと戦うが、抵抗することができなくなる。南の王に対して計略をめぐらす者たちがいるからである。

歴史で分かったことは、プトレマイオス8世に2人の側近がいるんです。

名前を覚えるのは断念しました。この二人が「王様、こうやったらいいですよ」

「こういう時はこうしたらいいですよ」と言うのが、全部裏目に出て負けるんです。

アドバイスって、全部聞いたらいいという話じゃないんですよ。

側近になるくらいの人たちだから、今までの実績は良かったかもしれませんが、このシリアとの戦争においては、失策に次ぐ失策を提言してボロ負け。それが26節。

26 彼のごちそうにあずかる者たち（2人の側近）が彼を滅ぼし、彼の軍勢は押し流され、多くの者が刺し殺されて倒れる。

しかし、完全屈服には至りません。

27 この二人の王（プトレマイオス8世とアンティオコス4世）は、心で悪事を謀りながらも、一つの食卓に着いて、まやかしを言い合う。しかし、成功はしない。

終わりは、まだ定めの時を待たなくてはならないからだ。

この二人の王は、心で悪事を謀りながらも、一つの食卓に着いて、まやかしを言い合う。これが外交です。外務大臣、なりたいですか？ほんまにメンタル強くなかったら、できないと思いますね。腹で思っていることと実際に言うことは違うんです。それぞれ自国の国益を最優先に考えるわけで、しかも、この二人の王は絶対君主だから、自分の命が懸かっている。表向きは友好的な食事会。腹の中では「分かるとるやろな。滅ぼしたるからな」ということで別れる。しかし、成功はしない。終わりは、まだ定めの時を待たなくてはならないからだ。

28 彼（アンティオコス4世）は多くの財宝を携えて自分の国（シリア）に帰る。彼の心は聖なる契約に敵対して事を行い、彼は自分の国（シリア）に帰って行く。

彼の心は聖なる契約に敵対して事を行い、彼は自分の国に帰って行く。帰る時に立ち寄る国があります。それはユダヤの国。途中エルサレムを通過する時、「ユダヤ性が全然抜けてない。ギリシアという超高級な文明にいつまで抗っているのか」強引なギリシア文明化に対して、ユダヤ人の中で反抗する人たちが出てきます。彼らをハシディームと言いますが、律法を重んじ、神への礼拝を最優先に考え、偶像礼拝なんか絶対にアウトなので、アンティオコス4世は気に入らない。そこで、彼らへの弾圧を増していくんです。

29 定めの際に、彼は再び南へ攻めて行くが、この二度目は初めの際のようではない。

初めの際には圧勝で、分捕り物も持って帰ったけど、2度目はそうではない。2度目はさらに大きな軍力を持ってエジプトに入り、エジプトはその前になす術もなかった。それで、プトレマイオス朝はローマに助けを求めます。ローマはずっと漁夫の利を狙ってました。シリアとエジプトが仲違いしたら、自分の軍力を使わなくても勝手に消耗してくれるだろう。ちょうどトントンの力でバランスが取れてたらお互い消耗戦ですが、一方が強くて一方が弱くてやられてしまうと、これはローマの国益にそぐわないんですよ。エジプトの方が押されているのか。だったら…ということで **30 節**。

30 キティム（キプロス島）の船が彼に立ち向かって来るので、彼は落胆して引き返し、聖なる契約にいきりたって事を行う。彼は帰って行って、その聖なる契約を捨てた者たちに心を向けるようになる。

キプロス島は地中海の島で地中海制覇のための軍港があり、戦略的要所です。そこにローマ海軍が軍艦を並べてシリアに向かって来て、アンティオコス4世に「エジプトからすぐ引け」この時のローマの使者がガイウス。彼はアンティオコス4世が立っている所の地面に円を描いて、「おまえがここから出る前にイエスカノーか言え。ローマの言い分を聞いて撤退するのか、逆らって戦

争するのか、今すぐ言え！」「撤退します」
なぜかという、この年にマケドニアがローマに滅ぼされたんです。

マケドニアはアレクサンドロスを生んだ国ですよ。今のエジプトもシリアも、元はといえばアレクサンドロスの部下ですよ。そのマケドニアが、今やローマになったんです。本国・ルーツのマケドニアを滅ぼしたローマは日の出の勢いで、そして軍艦が地中海にズラッと並べられて、「引け！」と言われたら引くしかない。アンティオコス4世は落胆して引き返しますが、はらわた煮えくり返ってるんです。この鬱憤をだれかにぶつけない。その腹いせに一番いい相手があった。ユダヤです。そして、エルサレム神殿に行って、やりたい放題します。

彼は帰って行って、その聖なる契約を捨てた者たちに心を向けるようになる。聖なる契約を捨てた者たちに心を向けるとはどういうことか。ユダヤ人で、ハシディームのように信仰を重んじて生きようというユダヤ人は半分。もう半分は「もう聖書ええやん。信仰はもういいやん。ギリシアでいいやん」この人たちを非常に重要な役職に就けて、ユダヤ人たちを摘発させたんです。

アウシュビッツ収容所で、ユダヤ人を監視していたユダヤ人がいました。カポと言います。ナチス側に寝返ったユダヤ人たち。彼らはナチス/ドイツ人の監視より、もっと残酷でした。

日本でも江戸時代、“隠れキリシタンあぶり出し” というのがあったでしょ。天草四郎の乱や、いろんなキリシタン大迫害がありましたが、キリシタンを迫害する時の代官・奉行・役人はほぼほぼ全員、元キリシタンです。キリシタンは何を最も嫌がるか、キリシタンの発想は何かということは、外の人は分からないですよ。でも、元キリシタンは、彼らが最も恐れていること、一番嫌なことが分かるんです。この裏切った人たち、捨てた人たち、転んだ人たちは、普通の人たちよりもっと残酷です。

聖なる契約を捨てた者たちは、聖なる契約に踏みとどまる人たちに、より徹底して残酷だったんですね。アンティオコス4世は、そのことをよく分かってました。そのユダヤ人たちを重用したんです。

31 彼（アンティオコス4世）の軍隊は立ち上がり、砦である聖所を冒し、常供のささげ物を取り払い、荒らす忌まわしいものを据える。

エルサレムは別名シオン。シオンには砦/要塞の意味があります。砦である聖所はエルサレム神殿。聖所である神殿を冒す。アンティオコス4世は神殿の中に、偶像ゼウスを据えました。そして、羊や牛をいけにえとして献げるのではなく、豚をいけにえとして神殿の中で屠ったので、一日中ひっきりなしに豚の鳴き声が神殿から響いていたと書いてあって、豚の血や肉汁が神殿に流されていきます。

ところで、いけにえを屠るって、どういうことか分かりますか？

いけにえには“全焼のいけにえ”といって、人が受け取る分が全くないものもありますが、大抵のいけにえは、一部は祭壇に献げますが、一部は取り下ろして食べるんです。つまり、豚のいけにえを献げるとするのは、豚の内臓をユダヤ人たちに食べさせるという意味です。

この時の律法学者エルアザルは御年 90 歳。ハシディームの代表者で、多くのユダヤ人を励ました人でした。彼に豚の内臓を食べさせようとするんですが、エルアザルは絶対に受けない。彼にはシリア人の親友がいました。この親友はエルアザルが拷問されて死ぬのは忍びないので、陰に呼んで言います。

「エルアザルさん、あなたが豚の内臓を食べないのはよく分かる。ここにユダヤの規定どおりに屠った、血抜きして焼いた牛の肉があります。これを、豚の肉を食べたと装って、皆の目の前で飲み込んでください。あなたが残酷な死に方をするのはあまりにも辛い。そうしたら、あなたは命を保ち、律法を破ったことにはならない。そうしてください」

「それは、嘘をつくという罪を犯すことになりませんか？ 90 歳のユダヤ教のリーダーが、人生の最晩年に豚の内臓を食べているのを若者たちが見たら、彼らはどう考えるでしょう？ 最後はあんな人でもそうなるんだから仕方ないと、迷ってしまうんじゃないですか？ 人の刑罰は、避けようと思ったらこんな方法で避けることができるけど、神の裁きを免れる道はありませんよ」

そして、自ら拷問の道具のところに行って、苦しみながら、「私の肉体はとても痛くて辛くて苦しい。なのに、心には喜びがある」と言って召されるんです。

この出来事を見た時、ユダヤの世界は真っ二つの反応に分かれました。

- ①「ここまでやって、この頑固者！」と、ますますユダヤの信仰を憎むユダヤ人
- ②この死に方を目にして、神の前に生きるとはということかと探られる信仰者。

新共同訳聖書に旧約聖書外典という名称で『マカベア記』があります。

マカベア記第二に、拷問のことが詳しく書いてあって、昨日も家内と「あれ読むの辛いなあ」もう耐えられませんよ。

ユダヤ人の男の子は生まれて 8 日目に割礼をします。この時は割礼禁止で、割礼したら死刑ですが、若いお母さんが息子に割礼させるんですね。それが分かった時、子供を抱いているお母さんをエルサレム城壁のてっぺんに立たせて、ボンと押して、皆の見せしめで殺す。

7 人の息子がお母さんに「内臓食べろ」と言うたびに、彼女はノーと言って。虐殺される前に、「神の前に立つのに、おまえたちは大丈夫なのか」とひと言ずつ 7 種類の言葉を語るんです。それは聖書のことばではないんですが、探られますよ。

豚の血を流すだけでなく、荒らす忌まわしいもの（偶像）を据える。

神殿の中にゼウスの偶像を置く。これが艱難時代に反キリストが行うことです。デビューの時は平和の使者のようにして現れるけど、ふと気がついたら世界の頂点に立っている。

そして、やがて再建される第三神殿で自分自身にいけにえを献げさせるように律法の内容を変え、反キリストの形をした偶像を神殿に置きます。

「その像はものを言うことができる。だれでもこの像を拝まない者は、大きい者も小さい者も売ること買うこともできないようにした」と**黙示録**に書いてあります。

やがて反キリストがやることを、実際にやった人物がいるということです。安息日は中止。ユダヤ人・エルサレム人という言い方は廃止。これからはアンティオキア人と名乗るようにと、ありとあらゆる信仰上の自由を踏みにじる。そして、神殿の中には重要な文書がありました。それは旧約聖書の写本です。それを全部集めて焼き払ったんです。旧約の神のことばに基づく信仰を根絶するために、出来ることは全部やる。それをやってのけたのが、この人物なんですね。

32 彼は、契約に対して不誠実にふるまう者たちを巧言をもって墮落させるが、自分の神を知る人たちは堅く立って事を行う。

先ほど言ったように、真っ二つに割れるんですね。重用される者と、どんな迫害があっても信仰の妥協をしない人たちが起こされる。

33 民の中の賢明な者たち（マカベア一族）は、多くの人を悟らせる。彼らは、一時は剣にかかり、火に焼かれ、捕らわれの身となり、かすめ奪われて倒れる。

マカベア一族は、ギリシア文明から目を覚まさせる賢明な者たちです。旧約聖書と新約聖書の間には400年間の中間時代があって、その時代のことはマカベア記を読むとよく分かります。マカベアとはどういう人たちか。BC167年、ほとんどのユダヤ人は、自分の信仰が見えないように隠れユダヤ教徒になっていました。ところが、モデイン村というところにはまだ燃え盛っているものがあるということで、シリアから役人が派遣されて偶像を据えたんです。

モデイン村の祭司は、非常に人望の厚いマッティアでした。役人たちはマッティアに「おまえが率先して偶像礼拝でいけにえを献げたら、ほかのユダヤ人たちはみな右へ倣いでやるから、おまえがまずいけにえを献げろ！」「いや、それだけは絶対できません。いっそのこと殺してください。偶像なんか拝むことはできません！」と言った時に、村人の一人が「じゃあ、私やります！」自ら率先して偶像礼拝に走るユダヤ人が起きた時、マッティアはもうブチ切れたんですね。

マッティアには息子が5人いて、彼らと一緒に、偶像礼拝すると言った人を殺しただけじゃなく、シリアから派遣された全役人を皆殺しにしました。それを見ていた村人たちはマッティアに従って、いったん山に逃げます。シリアから追手が行くんですが、山の中に入ったら地元の方が有利なんですね。ゲリラ戦でシリアの派遣軍を次々に撃破します。マッティア軍が強くなればなるほど追従者が増えて、シリアの小軍隊と同じくらいの規模になるんですよ。

しかし翌年、マッティアは亡くなりました。老体に鞭打って、無理がかかった。5人の息子に「息子のユダをリーダーにしてください」と言って息を引き取ります。

ユダは天性の軍事戦略家で非常に戦争に強い。彼のあだ名が「マカビー／マカベア」マカベアは金槌という意味です。ガチン！セレウコス朝シリア、ガチン！彼は破竹の勢いで広がっていき、最終的にエルサレムを奪還しました。神殿の中には豚の死骸や偶像がいっぱい。それを宮清めで全部きれいにし、旧約聖書に書いてあるとおりの宮に復元します。

その時、宮清めで8日間のお祭りをしました。これが“宮清めの祭り／ハヌカ”。「8日間、油がなくならずにろうそくが消えなかった」というのは4世紀に初めて出てくる話で、当時はどこにも書いてません。後に尾ひれが付いた話で、そんな奇跡はありませんでした。

3年間は独立を保ったけど、いろんなことがあって、残念な結果になるんですね。**34 彼ら（マカベアたち）が倒れるとき、彼らへの助けは少なく、彼らにくみする者には巧みなことばを使う者が多い。**

巧みなことばを使うは、**ダニエル書**では悪い意味です。マカベアについて行く人の中に、ギリシア的な考えがすっかり定着している人たちも混ざってるんですよ。だから、マカベア一族の最後は、純粹信仰とはとても言えない内容なんです。なんか後味悪い。「ついに正義が勝った！」なら気持ちいいじゃないですか。違うんですよ。

35 賢明な者たちのうちには倒れる者もあるが、それは終わりの時まで、彼らが練られ、清められ、白くされるためである。それは、定めの時はまだ来ないからである。

必ずしも報いらなかったんですね。いい結論ではない。でもそれゆえに、ユダヤ人の中に強烈なメシア待望信仰が生まれるんです。このマカベアの時代の後に新約時代が来る。新約時代の直前はどんな時代か。人間の不完全な救世主は救世主じゃない。本物のメシアが来てほしい。その気持ちが国中・民族中に充満する中で、ナザレのイエスがとうとうお生まれになったということなんですね。

ヘブル 11 章は信仰勇者列伝で、旧約時代に登場したユダヤ人たちの信仰の証しを次から次に紹介しています。

ヘブル人への手紙 11 章

34 火の勢いを消し、剣の刃を逃れ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を敗走させました。

火の勢いを消し。ダニエルの友人たち（シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴ）が火の炉の中に放り込まれた時、7倍も熱いのに火のダメージを受けなかったんです。

剣の刃を逃れ。この時のユダヤ人は本当に弱かったけど、弱い者なのに強くされた。

37 また、石で打たれ、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、困窮し、圧迫され、虐待されました。

11 章を見ると、信じて答えられた人たちと、信じていたのに何ももらっていない人の両方が出てきます。マカベアの最後は本当にそんな感じですよ。

39 これらの人たちはみな、その信仰によって称賛されましたが、約束されたものを手に入れることはありませんでした。

信じて戦ったのに、生きている間にいいことはありませんでした。約束されたものを手に入れることはありませんでした。

40 神は私たちのために、もっとすぐれたものを用意しておられたので、私たちを抜きにして、彼らが完全な者とされることはなかったのです。

時々不思議なのは、なぜいい人に悪い事が起こるのかということです。旧約聖書のヨブはこのテーマを考えるのに最適な人物で、世界中の全員を一瞬で見通すことができる神様は「ヨブのようにわたしを恐れて悪から遠ざかっている者は、地上の中に一人もいない。ヨブのクラスの人は一人もいない」と言われました。

そのヨブは一日で財産全部としもべを失い、7人の息子と3人の娘を失い、自分の健康を損ない、妻からは「神を呪って死ね」と言われ、もうどうにもならなかった時に3人の友人がやって来て、議論を吹っ掛けられるんです。

「あなたがこんな目に遭ったのは、あなたが良い人だったからではなく、良い人のように見える悪い人だったからだ」

ヨブは言い返します。1人目が反論し、ヨブが反論。2人目が反論し、ヨブが反論し、3人目が反論。これを3ラウンドやるんです。

ヨブは1人で3人を相手に3ラウンドやって、全部で10回議論するんですよ。友人は1人が話している間は休める。ヨブはずっと議論しっぱなし。病気の身で。病気で何でこんなに喋れんねんという疑問はあるけど。すごい。

しかも、この3人は人の話を聞いてない。僕は3人の中で一番嫌いなのはビルダデ。デマン人のエリファズも嫌い。ナアマ人ツォファルも嫌いです。ある事があった時、僕は毎日ヨブ記を読みました。ビルダデが一番赦せない部分がある。嫌い。

彼らが「良い人に悪い事が起こるはずがない。あんたは良い人やと思っている悪い人やったんや。だから、こんな事が起こった」と言うのに対して、ヨブは完璧な反論を言うんですね。「だれが見ても悪い人なのに、死ぬまでうまくいってるだけでなく、子孫も繁栄しているケースあるよな。あんたたちの論理が正しいなら、なぜそんな事が起こるのか」

それにどう答えますか？彼らは「あんたが悪いから」と。人の話を聞いてたか？！こっちは論理的に積み重ねて話しているのに、3人は人の話聞いて話すんじゃなくて、自分の言いたいこと言ってるだけなんです。だから、後で神様に叱られる。そしてエリフが出てきて話すけど、彼が言うことも、3人ほどではないけど間違ってる。なので神が「エリフも含めてみんなどけ。わたしが直接ヨブに語る」そして3つの答えを言われます。

私が一番感動するのは、「私は噂であなたのことを聞いていましたが、今私の自分の目であなたを見ました」というところです。

旧約聖書には、人になる前の神の御子が人としてこの世界にいられているケースがあります。ヨブは議論の中で何回か言うんですね。「私の言い分を取り上げてくれる弁明者がいたら、どんなにいいだろう」

それを聞きながら神の御子は、「わたしがいるが旧約時代はまだ、その光があなたに与えられていない…」ヨブが苦しんでいる時、神の御子は泣いていたと思います。

3人の友人たちのように、上から「おまえのここが悪い。あそこが悪い」ではない。

「ヨブよ、神があなたをサンプルとして選んだが辛いなあ」

この地上では分からないことがあります。受肉前のメシアを見た時、思っていた神とは全く違う。本当の答えは地上では分かりません。

地上で帳尻を合わせようとするとう無理があります。本当の答えは天にある。

定めのある時です。定めの時。つまり、神の主権がこの地上でも完全に成就する時に、私たちが不可解に思っていることの答え合わせや様々な舞台裏の説明を、神様がしてくださるに違いありません。私もそれを待っています。

次回は 11 章の第 4 部です。いよいよクライマックス、メシア到来の前の反キリストが出てきます。今回は反キリストのひな型。次は反キリストそのもの。

艱難時代の預言が語られているところですので、ぜひお越しください。

皆さまに神様との出会いがあることを願っています。

☆*: .. 0 ..:* ☆*: .. 0 ..:* ☆*: .. 0 ..:* ☆*: .. 0 ..:* ☆*: .. 0 ..:* ☆*

引用文献；新日本聖書刊行会『聖書 新改訳 2017』いのちのことば社,2017